

くもと草

小川未明

青空文庫

ちようど赤あかちゃんが、目めが見みえるようになつて、ものを見みて笑わらつたときのように、小ちいさな花はなが道みちばたで咲さきました。

花はなの命いのちは、まことに短みじかいのであります。ひどい雨あめや、強つよい風かぜが吹ふいたなら、いつなんどきでも散ちつてしまわなければならぬ運うん命めいでありました。

しかし、このはかない間まが、花はなにとつてまたこのうえの楽たのしいことがないときだったのです。晴はれやかな陽ひの顔かおも、またあのやわらかな感かんじのする雲くもの姿すがたも、みつばちのおとずれも、その楽たのしいことの一つでありましたが、その中なかにもいちばん喜よろこばしい心こころの踊おどることは、美うつくしいちようのどこからか、飛とんできて止とまること

でありました。

この道ばたに咲いた小さな花は、この世の中に、ぱつとかわいらしい瞳を開いたときからどんなに、ちようのくることについて空想したかしれません。

「自分のような人目をひかない花には、どうして、そんなに空想するようないないなちようがきて止まることがあるう？」

こう、花は悲しく笑ったこともありました。重い荷を車に積んでゆく、荷馬車の足跡や、轍から起こる塵埃に頭が白くなることもありました。花は、自分の行く末にいろいろな望みをもたずにはいられなかつたのです。

道ばたでありますから、かや、はえがよくきて、その花の上や、

また葉はの上うえにもとまりました。花はなは、毎まい日にち、日暮ひぐれ方がたになると、ブンブンと鳴なく、かかの音おとを聞ききました。またあるときは、はえの汚よごれた足あしで体からだをきたなくされることをいっていました。しかし、それをどうすることもできなかつたのです。

ある日ひのこと、怖おそろしい顔かおつきをした大おおぐもが、どこからかやつてきました。

「かわいそうに、かや、はえが毎まい日にちここへはやってきませんか？　そして、あなたを苦くるしめはしませんか？」と、くもは、さも深ふかく同どう情じょうをしたような言こと葉ばつきでたずねました。

花はなは、くもが、顔かおつきに似にず、やさしくいつてくれますので、なんだか涙なみだぐましく感かんじました。

「やつてはきますが、べつに、わたしをいじめはいたしませんから我慢がまんをしています。」と、花はなは答こたえました。

くもは、大おおきな光ひかる目めを怒いからして、

「それは、悪わるいやつらです。私わたしが、征せい伐ばつをしてあげます。あな

たは、そのかわり、しばらく窮きゆう屈くつな思おもいをしなくてはなりません。

「と、命めい令れいするようについて、くもは、ろくろく花はなの返へ

答こたも気きかずに、細ほそい糸いとで葉はと葉はとの間あいだや、茎くきと茎くきとの間あいだに網あみを

張はりはじめました。

花はなにとつてこのくもの巣すが、どんなに、かや、はえのくること

より迷めい惑わくであるかしのなかつたのです。

花はなは、この厚あつ顔かましくもが、せめて花はな弁びらだけ、糸いとでしばり

つけないのを、せめてものしあわせと考かんえていました。そして、
 くもは、横おうちやくもの着者であつて、かや、はえがこないときは、根ねも
 との方に隠ほれて眠ねむつていました。

ある日ひ、きれいなちようが飛とんできました。そして、花はなの上うえに
 とまりました。

「なんて、いい香においのする、かわいらしい花はなでしょう。わたしは、
 あなたのような香においが大だい好きです。いままで、いろいろな花はなの上うえ
 にとまりましたが、こんなになつかしい香においを吸すつたことがあります
 ません。どうか、お友ともだちになつてくださいなね。」といました。
 そのとき、花はなは、どんよろこなに喜よろこんだでしょう？ それは、びつク
 りしたほどでした。それから、ちようはなと花はなは、親したしくなりました。

ちようは飛び立つたかと思うと、まもなく、また自分を待っている花の上に帰ってきました。

そのとき、いままで眠っていたくもが、起き上って、すぐ花のところまできていました。そして、ぴかぴか光る目で、じつとちようを見つめていました。この有り様を知ると花は、急に小さな心臓がとどろきました。しかし、ちようは、ちつともそのことを知りませんでした。

「ちようさん、あなたのきれいな羽をお気をつけなさい。細かい糸にかかりますよ。」と、花は、ちように注意をしました。

ちようは、びっくりしました。そして、目をあたりにくばりますと、なるほど、細かい糸が葉の間に、茎と茎の間にかかっています。

それには、かや、はえの死骸しがいが、あるかなきかに残のこっているのはじめて見みました。

「ほんとうに、油断ゆだんがなりませんのね。あなたが注ちゆう意ういしてくださいさらなければ、もうちよつとでわたしは、網あみにかかるところでした。」と、ちようは、花弁はなびらの上うへにとまって、心こころから感かん謝しゃしました。

「ご機嫌きげんよう」

日ひが暮くれかかる前まえに、ちようと花はなとは、たがいにこういつて、別わかれを惜おしみました。

ちようが、見みえなくなると、怖おそろしい顔かおつきをしたくもが花はなの上うへにのぼってきました。

「おまえは、なんで、ちようにいらぬ注意ちゆういなどをするのだ。」
といて、花はなに向かむつて、くもは、なじりました。

「あなたは、かつてに、私わたしの家いえへ巣すを張はつているのでしよう。ど
うか、早はやくここからほかへいつてください。」と、花はなは、かえつ
て、くもに向かむつていつたのです。

すると、くもは、たいそう怒おこりました。

「生意なまいき気な、どうするかみておれ……。」といて、こんどは、
かわいらしい花はなの頭あたまの上うへまですつかり網あみを張はつてしまいました。

ちようは、翌よくじつ日のこと、花はなのいい香かおりを忘わすれずに、またやつ
てきました。そして、なに心こころなく花はなの頭あたまの上うへにとまろうとすると、
「だめです、だめです！ 早はやくお逃にげなさい。」と、花はなは苦くるしい

中なかから叫さけびをあげました。

ちようは、このいじらしい有あり様さまを見て、驚おどろいて飛とび去さりました。二、三日にちしてから、ちようは花はなの身みの上うえを気遣きづかつてきてみました。しかし、もうそのときは、小ちいさな花はなは枯かれていました。

——一九二三・六作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「くもと草《くさ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

くもと草

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>